

2022年6月26日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書8章27～30節

説教題：イエスを「キリスト」と告白して生きる

昨年8月、アメリカはアフガニスタンから撤退しましたが、その長い戦争の原因になったのは、2001年9月11日の同時多発テロでした。その時、ワシントンの国会議事堂を標的にしていた飛行機は、乗客の抵抗に遭い、ペンシルベニア州ピッツバーグ市の郊外に墜落しました。乗客は全員亡くなりましたが、地上には1人の死者も出さずにすんだのです。ワシントンへの攻撃を阻止した乗客の1人はトッド・ビーマーというクリスチャンでした。事件の後、残された奥様(リサ・ビーマー)は、失意の中で「でも神に信頼して、委ねて生きて行こう」という証の本を書いて、多くの人に励ましを与えました。彼女は次のように語っています。「私は神を信じる道を選びました。なぜか、その理由を知りたいとは思いません。ただ、私はその道を日々選び取ります…私はあきらめたくありません。人生は前に向かって進んで行くのです。私は信仰と希望と愛に行きます」。アメリカも、色々な問題を抱えています。しかしそのアメリカには「私は神を信じる道を日々選び取ります」というメッセージを語る人がいます。そのメッセージは今、アメリカもそうですが、世界中の人が揺すぶられている時、人々の目を神に向けさせる、ますます大きな意味を持って来ていると思います。

そして彼女の言葉は、今日の聖書箇所が中心的に語るメッセージを要約している言葉でもあるように思います。今日も2つに分けてお話しします。

1：内容～主イエスを「キリスト」と告白したペテロ

27節に「イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられた」(27)とあります。今日の箇所は、ペテロがイエス様のことを「あなたは、キリストです」(29)と告白する箇所です。この告白を境にして「マルコ福音書」は「十字架」に向かって書き進められることになります。その重大な「ペテロの告白」を引き出す箇所としてイエスが選ばれたのがピリポ・カイザリヤでした。なぜここを選ばれたのでしょうか。

ピリポ・カイザリヤ(現在ゴラン高原に存在)は美しい自然に囲まれた風光明媚な場所だそうです。ローマ帝国がこの地域を征服した後、ローマ皇帝はここを自分のものとししました。しかし、皇帝の後ろ盾でヘロデ大王がパレスチナの領主となった時、皇帝(カイザル)はここをヘロデ大王に与えました。ヘロデはそのことに感謝して、また皇帝に阿る目的もあって、ここに皇帝(カイザル)を祭る大理石の神殿を造り、カイザルを神として崇めたと言います。「ユダヤ人の王」が…です。カイザリヤという名前はカイザルから来ています。そのようにピリポ・カイザリヤは、皇帝礼拝が行なわれ、時の権力者の威光がいやが上にもクローズ・アップされる所でした。またピリポ・カイザリヤは、ギリシャ神話の神である「パン(パーン)神」という牧羊の神が祭られている場所でもありました。牧羊に精を出す牧童達が、そこに「牧羊の神パン」を祭るための神殿を造っていた、そういう場所でもあります。さらにここは、山の中腹からヘルモン山の雪解け水が勢い良く湧き出ている所でもあり、その流れはヨルダン川の源流となりました。ヨルダン川は、「旧約」の歴史の中で様々な役割を果たす川です。その意味でヨルダン川の源流は、ユダヤ人にとってユダヤ教の歴史や伝統をいやが上にも感じさせました。要するにピリポ・カイザリヤは、ギリシャの偉大な文明を意識させ、またユダヤ教の歴史と伝統を意識させ、何よりも当時の世界を支配しているローマ皇帝の絶大な権力を意識させるような場所だったのです。逆に言うと、それらに比べて『「ナザレ出身の放浪の説教家イエス」を信じる信仰』が、ちっぽけに見えるような場所だったということです。私達(日本人キリスト者)は、しばしばキリスト教会の小ささを意識させられることがあります。「小さな群れに属するこの私が、イエスに捧げる小さな祈りが、何になるのか。この世の現実の様々な力の前で私達は何と小さな存在か」、そう思われ、

内側に、内側に籠もるような思いにさせられることがあるのではないのでしょうか。弟子達にとって、ピリポ・カイザリヤが正にそのような場所だったのです。その場所でイエス様は、弟子達に重大な質問をなさるのです。その質問に弟子達が何と答えるのか、それは、ここまで弟子達を訓練して来た、その真価が問われることだったのです。もし弟子達がイエス様の期待に全く答えられないとしたら、イエス様は弟子の教育をやり直さなければならないということになるのです。

イエス様はまず聞かれます。「人々はわたしをだれだと言っていますか」(27)。彼らは答えます。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます」(28)。この言葉には背景があります。ユダヤ人は「私達は、神の特別の民、選民である、だから私達は、世界において特別の地位にあらねばならない」、そう考えていました。事実ダビデ王、ソロモン王の時代、イスラエル人は中東世界の覇者だったのです。しかしその後、アッシリア、バビロン、ギリシャ、ペルシャ、ローマと大国の支配の下で細々と生きることを余儀なくされて来ました。しかし人々は、神の言葉に期待していました。かつて神はダビデに「あなたの身から出る世継ぎの子…の王国を確立させ…その王国…をどこしえまでも堅く立てる」(2サムエル 7:11~13)と約束されました。人々は「ダビデの家系からもう一度イスラエルに栄光をもたらしてくれる王—{油注がれた者—(神の特別の役割を果たす者、それを『メシア』と言った。『メシア』のギリシャ語訳が『キリスト』)}—が登場して来るに違いない」と期待しました。しかし、待っても、待っても状況は変わらない。その中で「ダビデの子孫からメシアが来る」という思想は引き継ぎながら、「もう普通の現実的な方法ではどうにもならない、『どんなに強い国にも立ち向かい、打ち負かすことの出来る力』で神の救いを実現する、そういう人が来なければどうしようもない。神は必ずそのような救い主(メシア)を送って下さる」と希望を持ち始めたのです。それがイエス様の時代です。「そのような救い主(メシア)が来る時には、その前に『旧約』の預言者エリヤが『メシアの先駆者』としてやって来る」ということも信じました。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます」(28)という人々の評判は、その希望の上にあるのです。「バプテスマのヨハネ」は、信仰復興運動を展開して社会に大きな影響を与えた人です。人々は彼を「エリヤの再来」と見ていたのではないのでしょうか。彼が殺された後は、人々は「その再来」をイエスに見ました。また、イエス様が古い慣習に縛られずに権威を持って教えをなさる姿に、人々は「メシアの先駆者」としての姿を—(少なくとも「神の言葉を持っている預言者」としての姿を)—見たのではないのでしょうか。

さて、それを前提にしながら、しかしイエス様が本当に尋ねたかったのは、その次の質問です。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか—(『それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか』新共同訳)」(29)。「イエスはこの質問に全てを賭けていた」と言った学者もいます。そこに弟子達を代表してペテロが言いました。「あなたは、キリスト(メシア)です」(29)。この答えは、私達から見れば何でもないように見えますが、素晴らしい答だったのです。人々はイエス様のことを「メシアの先駆者」としては見る事が出来ました。しかし「メシアそのもの」と見ることは出来ませんでした。しかし彼は、イエス様の中に「メシアの到来」を見ました。「放浪の説教家ナザレのイエス」を「世界に決定的な救いをもたらす者」と見る事が出来たのです。だからイエス様は喜ばれました。「マタイ福音書」の平行箇所を見ると、イエス様はペテロに「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です」(マタイ 16:17)と言っておられます。

しかし同時にイエス様は、「自分のことをだれにも言わないようにと、彼らを戒められ」(30)ます。確かにペテロは、イエス様を「メシア」だと認めた。しかし彼が「メシア」と言う名前を使う時、やはり他のユダヤ人と同じような期待があったのです。「政治的に偉大な権力者、どの王よりも優れた王、ユダヤ人を虐げて来た人々を裁いて復讐する王」を考えていたでしょう。その意味でペテロは、「ではメシアとは何をする者なのか」、教えられて行かなければならなかった

のです。教えられ、本当の意味で理解して、そして自分も、イエス様の十字架を担げる人間にならなければならなかったのです。だからまだ言うてはならないのです。

2：メッセージ～主イエスを『キリスト』と告白して生きる祝福

この個所のポイントは 29 節の「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」(29)というイエス様の質問です。この質問は、イエス様の目の前にいる弟子達にだけ為されているものではありません。今、私達に向かっても為されている質問です。私達は、イエス様の質問に対して、イエス様に何と答えるでしょうか。

私達は今、神様(イエス様)に向かって礼拝を捧げています。それを神が喜ばれるし、礼拝を通して神様と交わることは、信仰生活の土台だからです。礼拝で私達は、讃美を捧げ、祈りを捧げ、御言葉を聞き、捧げものを捧げ、コロナ禍でなければ交わりを喜びます…。これら1つ1つは、礼拝の要素として大切なことです。それが私達の霊的生活を支え、励まします。しかし一方で、礼拝はそれだけのところではありません。礼拝で大切なことは、私達がイエス様にお目にかかることです、神にお会いすることです。それは目に見えない霊的な事柄です。だから私は礼拝の前に祈ります。「礼拝が祝され、お1人びとりが神様にお目にかかれますように」。神にお目にかかるといのは、言葉を換えれば「あなた…は、わたしをだれだと言いますか」というイエス様の問いを聞くことです。そしてその時、「あなたは私の救い主です。あなた以外には『救い』はありません」とイエス様に申し上げることです。そこに礼拝の大切なポイントがあるのです。

しかし、その質問はまた、礼拝の中でだけで聞かれることではありません。イエス様は尋ねられます。「あなたは毎日の生活の中で、私を何と呼んで生きているのか」。私達は日々の生活の中で「イエス様、私はあなたのもです。私はあなたを『私の救い主』と呼び、そう告白し、そう心して生きています」と答え得るでしょうか。それが私達へのチャレンジです。その告白はもちろん言葉でなされるものですが—(この次の個所でイエス様は、ペテロの信仰告白を受けて直ちに「では私をメシアと告白する者はどのように生きれば良いのか」を教え始められます。その意味で)—私達がイエス様を「救い主(メシア/キリスト)」と告白する、その告白の誠実さは、私達の生き方によって実を結ぶ—(実が測られて行く)—のではないかと思います。パウロは言いました。「しかし今は、わたしたちは…御霊に従う新しい生き方で仕えるようになっているのです」(ローマ 7:6)。その意味で私達は、口で告白すると同時に、生き方によって告白して行く必要があるのだと思います。いや私達が、本当に告白するならば、それは必然的に生き方に現れてくるのではないのでしょうか。

しかし、私が今日言おうとしていることは、「だからこう生きなければならない…」ということではなく、私達がイエス様への信仰を告白して、それを大切に、そこに両足を乗せて生きる、その時にやって来る祝福を、私は語りたいのです。先程も申し上げたように、私達は世の中に翻弄されます。私達の小さな生活は、様々な出来事の中で揺すぶられます。私達はその中で、時に神を見失います。また世の現実、私達に、神を思わせるのではなくて、むしろ「神なんかいない、神がいたとしても何もしない」と思わせることが多いのではないのでしょうか。その中で「イエスはキリストです」と告白するとは、どういうことか。私は思います。それは、目に見える現実がどうであろうとも、イエス様を救い主として「私の救いはイエスから来る、他に救いはない—{『詩篇 121 篇』は告白します。「私の助けは、天地を造られた主から来る」(詩篇 121:2)}—このところに立ち続けることだと思えます。

フィリップ・ヤンシー—(アメリカ人のクリスチャン作家・ジャーナリスト)—が当時の東ドイツのことを書いている記事を読みました。1989年～1990年、東欧諸国は雪崩を打って「平和革命—(一部の例外を除いて)」を成し遂げ、共産主義体制を倒して行きました。その象徴的な出来事は「ベルリンの壁の崩壊」です。(今のロシアの大統領は「20世紀最大の悲劇は、ソ連が崩壊し

たことだ」と言っているからです、時代に逆行している思想の持ち主だと思わされます)。フィリップ・ヤンシーによれば、ベルリンの壁に穴を開けたのは、教会の「祈り会」から生まれた小さなデモ行進だったそうです。教会は「共産政権を打ち倒そう」と叫んだわけではありません。「平和のために祈ろう」と人々に呼びかけたのです。多くの人々が現状を憂いて集まって来ました。人々は「祈り会」で祈った後、平和的に整然とデモ行進を行ないました。その行進に参加する人々が増えて行きました。東ドイツ国内、どこでも「教会の祈祷会」からデモ行進が生まれたそうです。時には秘密警察(シュタージ)によって「祈り会」が邪魔されました。でも人々は暴力に訴えることはなかった。祈って整然と行進を続けました。しかし「平和的」と言ってもデモ行進です。政府による弾圧が現実味を帯びて来ました。1989年11月9日、その日は「大規模な弾圧があるだろう」と噂されました。事実、政府は軍隊に「デモ行進への発砲」を命じていたのです。しかし、その日も「教会の祈り会」から行進が始まり、そして何十万という数に膨れ上がったのです。デモ隊がベルリンの壁に押しかけた時、不思議に軍隊は発砲しなかった。そしてそのまま人々は壁を通り抜けて西ベルリンに入っていくことが出来たのです。結果的に「ベルリンの壁」は崩壊したのです。ライプツィヒという町の大通りには、その後、大きな横断幕が掲げられました。そこには「教会よ、ありがとう」という文字が書いてあったそうです。{かつてイエス様は言われました、『…もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、その通りになる…』(マタイ 17:20)}。ヤンシーの記事にはこうありました。「東ドイツでは、今でも当時のことは奇跡だと語られている。祈りが山を動かすかどうかはともかくとして、ライプツィヒの祈りは確かに住民を動かした」。

私が教えられるのは、神を否定する国家権力の中で、主イエスを「キリスト」と告白し、主イエスに祈りを捧げ、イエスの助けを信じて生きた人々(行動した人々)が、巨大に見える現実を変えてしまったということです。生きる現実の中でイエス様を「私の救い主、他に救いはない」と告白して生きて行くことが、私達に力を与えるのです、希望を与えるのです。そして、その力と希望が私達の現実を変えて行くのです。イエスを「キリスト」と告白し続けることは、単に自分を鼓舞することではない。神の働きを受け、聖霊の働きを受け、私達を立たせることなのです。私達には色々なことがあります。でも私達は「イエス様は私の救い主です、救いはイエス様から来る、他に救いはない」と告白し続けて、そこに立って、神の力を頂いて、生きて行きたいと願うのです。